

## 〈数字〉を哲学する

——現代社会における〈数字〉の役割とその由来——

大 田 孝 太 郎

智慧はかくのごとく言う。「力が存在するところでは数もまた支配者となる。数は、より多くの力をもつものなのだ。」と。

——ニーチェ『ツァラトウストラはかく語りき』<sup>11</sup>——

### 序

現代社会に生きるわれわれが物事を評価する場合に、数字というものが大きな威力を持っていることは誰も否定できないであろう。家計、物価、賃金、偏差値、営業成績、貯蓄高、GNP、経済成長率、資本投資、債権額、等々、日常レベルの身近かなものから国家レベルの比較に到るまで数字がその尺度となるものは枚挙にいとまがない。数字自体は個々の主観的な価値意識を越えた、誰もが認めざるをえない「客観性」をもっていると考えられているため、そのことがかえって人びとの価値意識に大きな影響を与えることになる。個人間の比較や企業間、国家間の比較に数字が使用されるとき、数字の「客観性」がいかに人間の価値意識に深く食い込み、それが人間の全体的な認識を見誤らせるかということは、偏差値による受験生のランク付け、資本金や経常利益による会社のランク付け、貿易収支の多寡による国力の判定、等々に関する個々の例を考えてみれば容易に理解できよう。このように数字が現代社会において絶大な威力をもっていることは誰の目にも明らかであるが、これほどまで数字が幅をきかせる背景にはどのような価値観がひかえているのか、そしてまた逆に数字がこ

のような価値観をいかに支え補強しているのか、さらにまたそのことが現代に生きるわれわれにとっていかなる意味をもっているのか、ということを変更して考えてみることは、「数字のロマン主義」(M. ヴェーバー)<sup>(2)</sup>に多かれ少なかれ身を浸している現代のわれわれにとって無意味なことであるとは思われない。それはともあれ、数字を通して、現代社会とその中で生きている人間を——自己批判をも含めて——多少とも対自化したい、というのがこの小論の意図である。

われわれはまず、数字が現代社会においてどのような役割を果たしているかを現代社会を支えている主要な領域である教育、会社、医療の三分野にそくしてもう少し具体的に考察することにしよう。

## 1. 現代の状況

### a) 教育

数字の支配ということで、まず何よりもわれわれの脳裏に浮かぶのは教育の世界である。そして現代の日本の教育において常に批判的となっているものは、かの「偏差値」であることは周知のとおりである。では「偏差値」という数字の物神はどのような魔力をもっているのか。

大学に入学したばかりの学生が「新入生演習」で日本とイギリスの教育制度を学んだあと、自分自身の受験時代を振り返って書いた文章を以下に二つほど紹介しよう。「自分はたった数カ月前までは氏名、個性、人格もなく、ただ『偏差値』というものを身にまとい、大学受験者専用の電車にのっていた。」「最初は好きな語学をという目標をもって勉強していたのが、そのうち大学に入ることが目標になり、しまいにはどこでもいから大学に入りさえすれば、と思うようになってしまった。その結果、今では目標がなくなってなんとなく毎日を過ごしている。」<sup>(3)</sup>これらの学生の言葉は、現代の教育において「数字」というものがいかに圧倒的な力をもって人間の生き方さえをも変えてしまうものであるか、その事情を端的に語っている。上の学生の言から明らかのように、数字はなによりもまず、人間

一人ひとりの個性を奪う。これは数字の本性上当然のことである。多様な側面をもつものを量という一つの側面へ抽象化することが数字の数字たる所以だからである。<sup>(4)</sup>言うまでもなく人間は多面的に生きている存在である。或る者は計算能力は人よりも劣るかも知れないが人を説得する能力は人並み以上にあるかも知れない。また他の或る者は英語の読み書きは苦手だが誰よりも英米人の生き方に興味を持っているかも知れない。計算能力や外国語の読み書きは数量化できるが、人を説得する能力や外国にたいする興味、人の善良さといったものは数量化しにくい。しかもかかる数量化できないものの中にこそ、その人間独自の価値が存在するとするならば、およそ数字は人間をその独自の本性とは反対のものへ変えてしまうものであると言えるだろう。こうして数字は人間の中にある多様な能力や可能性を捨象し、雑多な知識をどれだけ多く記憶し、それをいかにすばやく機械的に運用できるか、といったような数量化できる部分だけを取り出して比較の対象にし、<sup>(5)</sup>それを基準にしてすべての人間を評価し価値づけるのである。これが「偏差値」という数字の怪物の実際的な役割であると言えよう。

もしも、「豊かな人間とは、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である」<sup>(6)</sup>と言えるとするならば、偏差値による現代日本の選別の教育は人間の多様な生命発現の全体を窒息させ、数字で量られるかぎりの部分的能力を人間にとって至上のものと思いなして、人々を個性のない一面的な人間へと追い立て、およそ豊かな人間とは正反対の一次的な人間を日々再生産していると言えるだろう。

このように、数字は人間の多様な個性を一元化し比較可能なものにすることによって、人間同士の激烈な競争に油を注ぐ役割を果たすのである。目的地に着くためには、「鈍行」で行く人もあろうし、「急行」で行く人もあるはずなのだが、現在の受験制度の下では、人は偏差値という個性も人格ももたない、虚ろな数字だけが書き込まれたのっぺらぼうのレツテルを顔いっぱい貼られ、受験専用の電車で詰め込まれ、電車の外の景色を楽しむ余裕もなく、目的地はどこかということもはっきりとわからず、ただ

ひたすら自分に貼りつけられた数字と他人の数字を較べながら否応なく押し合いへし合いをはじめなければならないのである。「……『偏差値』というものを身にまとい、大学受験専用の電車に乗っていた」という先に引用した学生の言葉は、以上のような数字の物神にとりつかれた現代の教育の状況を短い言葉ながら、的確に言い当てていると言えよう。

数字は人びとの個性を失わせ、競争へと駆り立てるだけではない。それは目標へ到り着こうという情熱を失わせ、手段を自己目的化してしまう。最初は、語学が好きであるとか、病気で困っている人を助けたいという純朴な気持ちをもって将来に夢を託していたのが、現実のテストの成績やランク付けによって自分の能力を妙に納得させられてしまい、当初の目的や自分の適性がどうであれ、とにかく一点でもよい点をとって、〈よい〉大学と言われている大学へ入りたいと思うようになる。かくするうちに当初もちつづけていた夢は完全に忘れ去られて、自分が何のために勉強しなければならないのか、という本来ならば何よりも先行しなければならないはずの真の目標が失われ、目前のテストの成績がすべての関心の中心になってしまうのである。かくて数字は、目標への情熱を失わせ、手段を自己目的化することによって、受験生にあらゆる転倒した価値意識を植えつけることになるのである。

こうして数字によって人間の価値評価がおこなわれると共に、それがまた、高校や大学のランク付けへと拡大され、いわゆる学歴社会を支える強固な価値体系を作り上げることになる。教育界における数字によるさまざまなランク付けの根源にあるものを探っていけば、われわれは最後に、日本独特の「会社主義」に行き当たらざるをえないであろう。

## b) 「会社主義」社会

西洋は天賦人權、人賦國權であるのに対して、日本は天賦國權、國賦人權である、という福沢諭吉の名言は、残念ながら第二次大戦までの日本においてばかりではなく、戦後の日本においてもより深くより広い意味であ

てはまると言わざるをえない。戦後、国家に代わって会社がわれわれの生死を左右する運命共同体となったことはいろいろな論者が指摘するとおりである。私的な利潤追求を自己目的とする会社に忠誠をつくす「企業戦士」は、みずからの会社のためにいわば生死を賭して戦うことによって企業間同士に激烈な競争を生ぜしめる。そこにはおのずから優勝劣敗の法則によって会社間にランク付けが行われる。かかるランク付けが人々の観念に植えつけられるのは、それを裏付ける実体が数字によって誰の目にも明らかかなような「客観的な」形で示されるからである。奥村宏氏はつぎのように述べている。「日本ほど会社の格、あるいは会社の位が重視される国はなく、一流会社と二、三流会社、一部上場会社と二部上場会社、非上場会社などといった形で会社間の階層的秩序がたえず問題にされる。しかもそれは単にひとびとの観念の問題だけではなく、会社間の格差を裏付ける実体が現に存在している。一流会社は、二、三流会社にくらべて賃金が高いし、社内福祉の制度も充実している。そして一流会社の方が、二、三流会社よりも生産性が高いし、労働力の安定性も高い。銀行借入金の利子も一流会社の方が二、三流会社よりも低い。そうであるとするなら一般の人が二、三流会社より一流会社を選ぶは当然のことである。<sup>(7)</sup>ここから会社のランク付けが暗々裏に個々の人間全体の評価の基準とされるに到る。だから、かかる事情をよく心得ている企業予備軍たる大学生は、社会問題や世界経済の動きに無関心であり得ても、企業の資本金や初任給、一部上場会社であるか否か等々といったことに関する情報には異常なほど詳しい、という事態が生じもするのである。<sup>(8)</sup>その会社が自分の適性に合っているかどうか、とか、自分にとってやり甲斐がある仕事であるかどうか、等といういわば〈主体的〉条件はさしあたり考慮の外に置かれ、賃金の高低、生産性の高低、福利厚生が行き届いているかどうか、等々といった〈客観的〉条件がまず関心の中心に置かれる。そしてこれら〈客観的〉条件の指標となるのが、資本金や従業員数、経常利益、等々といった数字によって表される経済力であることは言うまでもない。

このように数字を基準として会社を選び——というよりも現実には企業による大学のランク付けによって学生が選別されるのであるが——、たとえ希望どおりに一流企業といわれる会社に入れたとしても、そこでも数字を指標とする業績を求めて激烈と言えるほどの競争社会が待ち受けている。その典型的な例は日本の企業独特のノルマ制であろう。企業の業績を上げるべくノルマ制度をネックとして、人びとはノルマ達成のために長時間労働を強いられ、そればかりではなく最近のような不況になると差し当たり必要でもない自社の製品を半ば強制的に買わされるという事態まで生ずることになる。ノルマの達成如何が昇進や人間そのものの評価にまでも直接ひびいてくるがゆえに、例えば銀行や証券会社などではノルマ達成のために、各セクションや支店間でしのぎを削る競争が行われ、それが過労死や金融、証券界の一連のスキャンダルを誘発する原因ともなっていることは識者の指摘するところである。<sup>9)</sup>

このようにみえてくると数字を指標とする完全な序列化社会——かかる序列にのっとって価値基準が定められ、それによって人間そのものの価値までが決められてしまう社会——が現代のわれわれの社会の特徴をなしていると言えるだろう。このような社会では数字がすべてのものの上に君臨するのも理の当然である。なぜなら物事の量的な差異を表すのに数字ほど好都合なものは他にないからである。

現代のように数字に基づく価値意識が支配的になると、人間はますます現実の具体的なものから遠ざかって行くと共に数によって抽象化された世界を具体的な現実そのものと取り違えて人間の意識自身が物化してしまう。このような事情をサン＝テグジュペリは童話の主人公に次のごとく雄弁に語らせている。「おとなたちは、数字がすきなんだ。新しくできた友だちのことを話すと、おとなの人たちは、かんじんかなめのことはひとつもききません。〈どんな声の人？〉とか、〈好きな遊びは何だい？〉とか、〈チョウを採集する人？〉とかいうようなことはてんできかず、〈その人、いくつ？〉とか、〈きょうだいは、なん人もいるんだい〉とか、〈体重はどの

くらい?〉とか、〈おとうさんは、どのくらいお金もうけをするの〉というようなことを、きくのです。そして、やっど、その人を、わかったつもりになるのです。おとなの人たちに〈桃色のレンガのでできていて、窓にゼラニウムの鉢がおいてあって、屋根の上にハトのいる、すてきな家を見たよ……〉といっても、どうもピンとこないでしょう。おとなたちには〈十万フランの家を見たよ〉といわなくちゃいけないんだ。すると、おとなたちは、とんきょうな声をだして、〈なんてりっぱな家なんだろう〉というんです。<sup>(10)</sup>」

数字は具体的な人間の世界を抽象的で無味乾燥な世界に変えてしまうだけではない。かかる抽象の世界を最も真実で価値ある世界だと人びとは考えるようになり、逆に現実の具体的な生活に直接結びついた世界は意味のない無価値な世界とみなされる。そこから転倒した価値観が生じる。現実の生活に直接に役立つ仕事は三Kといって敬遠されさげすまれるが、実際の生活に根をもたない虚業が「カッコイイ」ものとしてもてはやされる。M. エンデはこのような倒錯した価値意識を次のような象徴的な言葉で語っている。「現代の競争・成績社会では、完全に病的なプレステージ観がはびこっている。植木屋は社長よりははるかに低く評価される。しかし腕のいい植木屋は、馬鹿な社長より百倍も価値があるというのにね。ものごとを正しく見るために、価値の尺度をすっかりひっくり返さなければならない。<sup>(11)</sup>」直接自然に働きかける農業や手仕事は嫌われ、いわゆる「モノ離れ」が進み、経済がソフト化するにともなって、就業人口が第一次、第二次産業からサービス業を中心とする第三次産業へと移動するのも、かかる価値意識に支えられてのことであると言ってよいだろう。このような状況を相対化し、それに鋭いメスを入れなければならないはずの経済学そのものにも、上記のような価値意識に基づく序列化が存在する。モジュール（数式によって表される経済モデル）をいかにうまく作れるかによって、マス・エコノ（数理経済学）、ミクロ（価格分析）、マクロ（国民所得分析）、デブプロス（経済発展論）、オー・メトルズ（実証的研究）という序列と

格付けが経済学の世界に存在していることは、レヨン・フーフがつとに指摘するところである。<sup>(12)</sup>

### c) 医 療

さらにわれわれに深い関わりのある医療の世界に目を移せば、ここでも数字が猛威をふるっている。保険点数制という数字による価値体系が日本の医療制度全体を覆っている。保険の適用を受けている患者の診断、投薬、検査、手術などに対して、厚生省によってこと細かく点数（一点の単位を10円）が定められており、それに基づいて各保険医療機関は医療行為に対する報酬を受け取るわけであるが、この保険点数制によっては医療関係者の技術は正当に評価されず、とくに診察や手術が行われた場合、医師や看護婦、検査技師などの医療技術者の技術料は経験を積んだ人もそうでない人も一律に低い保険点数に甘んじなければならない。例えば骨折の一般的な手術を行えば、実際に手術にかかった費用は保険点数にもとづいて支払われる金額より小さく見積もっても二、三万円はオーバーするといわれる。<sup>(13)</sup> 医療関係者の技術が著しく低く見積もられているばかりではない。もっと憂慮すべきことは、このような点数制度の下では経験の浅い医師や未熟な医師が手術に失敗して、再度手術を施せば保険点数がそれだけ加算されるという事態すら起こり得る、ということである。<sup>(14)</sup> こうなると技術的にも倫理的にもりっぱな医師はそうでない医師によって駆逐されてしまうであろう。貨幣の世界と同様に、点数という数量だけを問題にしてその内容を問わない世界では、かのグレシャムの法則と同じ法則が働くのである。

手術や診療という病人にとって生死を分けることにもなりかねない医療行為に対する上記のような低い点数評価のゆえに本来ならば大幅な赤字になるはずなのだが、それを極力回避せんがために医療機関は薬剤料や検査料といった比較的点数を稼げる項目の比率を増やすよう否応なく駆り立てられる。宇沢弘文氏は日本の医療機関の矛盾した経営の現状を次のように的確に述べている。「…診察、手術、処置などという人間的な医療行為に



かんしては、実際にかかる費用が、保険点数表から算定された支払額をはるかに上回るのが一般であるが、検査、投薬、輸血、あるいは特殊治療材料などにかんしては、その逆の現象がみられるからである。簡単にいってしまうと、医師、看護婦などの人的費用、施設、機械・器具の維持にかかわる物的費用などについての赤字を、検査料、薬剤料、特定治療材料、輸血料などの項目からでてくる黒字で補填しているのが、日本における大方の医療機関の経営的な実態なのである。<sup>(15)</sup>こうなると医療関係者のあいだで転倒した意識が生じる。医学的な観点から望ましい治療をしようという所期の目的に対する彼らの関心は薄れ、保険点数を稼げる検査、投薬、輸血などにおのずから関心は集中する。点数がすべてであって、患者は治療の対象というよりも単に点数の担い手となってしまいかねない。医は算術であるという事態が生じる所以である。ここでも数字は人間の意識を物のレベルにまで押し下げる魔力をもっている。

さらに数字は具体的な医療行為そのものに関係する人たちの意識にも深く食い込む。医療関係者は検査の結果あらわれる数値やデータにたよりがちになり、患者自身の心理のさまざまな壁といった数値化され得ないものには目が届きにくくなる。病気とは肉体だけでなく、精神や社会の次元にも係わっているがゆえに、病気の診断と療法はこれら三つの次元を考慮にいった具体的で総合的な判断に基づかなければならないはずなのだが、数値やデータは一個の生きた人間の治療のためというよりもむしろ、何々病の担い手であるかぎりの人間からその病根を摘出するためにのみ用いられる。だから手術室では患者の身体につながっているさまざまな器械装置が表示する測定値にのみ気をとられて、肝心の患者自身の表情や動きにはほとんど注意がはられないといったことも起り得るのである。

医療を受ける者も計器や試薬に表れる数値によって一喜一憂する。血糖値が通常の範囲より少しでも越えたと地獄に落ちたような気持ちになったり、血圧が正常といわれる範囲よりも僅かでも越えたと憂鬱な気持ちになるのは、われわれが数字の「客観性」に信仰に近いまでの信頼をおいてい

る証左であろう。

以上、現代社会において、いかに数字がわれわれの生活に広く深く浸透してわれわれの意識までも規定しているか、その一端をごく大まかに見てきたわけであるが、ここでこれまで述べてきた数字の役割を簡単に振り返っておこう。

数字はまず、個々の人間の個性を捨象して、人間を一律に同質なもの、個性のないものにしてしまう。近代の平等思想は、数字が社会的な力を得るのに絶好の地盤を与えたが、近代に対して多少とも批判的な思想家は平等思想の中に含まれている人間の疎外というネガティブな側面を強調する。

例えばキルケゴールは、「平等」という美名の下に、個々人からその個性を奪い、あらゆる人間を一律に低劣なレヴェルへ引き下げる近代特有の思考態度を「水平化」と呼ぶ。「水平化の抽象はきびしい東風にも似たひとつの原理である。この原理は一人ひとりの個人となんらさほど望ましい関係を結ぶことなく、万人にたいして平等な抽象の関係を結ぶばかりである。」<sup>(16)</sup> かかる水平化の波に洗われて人間は本来の自己を見失い、「群衆のなかでの一つの単位」<sup>(17)</sup> になりさがるのである。近代におけるこのような人間の水平化＝抽象化が数字にこれほどまでの社会的威力を与えたことは言をまたない。がしかし、人間は単に、他の誰とも代替可能な一つの数となって世間の中に埋没し、そこで安住しているだけの存在ではない。水平化によって同質のものとされた人間は、今度は逆に無限の量的差異を求めて激烈な競争に駆り立てられる。それゆえ数字はまた、比較の手段としてその威力を発揮し、さらにそれは人間を支配する手段へと先鋭化する。それと共にわれわれの意識も変化する。数字が価値判断の基準（さきの例で言えば、会社の格付け→大学や高校の格付け→人間の格付け）となるやいなや、真の目標は見失われ、目標への情熱は殺がれて、人間の意識は物のレヴェルへ引き下げられる（受験勉強における目標の喪失、医療の点数制度、等々）。ここに目的と手段、主体と客体との完全な転倒が起こる。

かくて現代社会における数字の機能はおおよそ、次の五つにまとめられるであろう。

- 1) 水平化作用
- 2) 比較の手段、したがって価値判断の基準
- 3) 人間を支配する手段
- 4) 真の目標への情熱を喪失させることによる目的と手段の転倒
- 5) 意識の物化

これまで説明してきたように上記の五つの機能は個々別々のものではなくて、相互に関連しあって一つの全体としての数字の役割を形作っている。

それにしても現代において数字がかくも大きな威力をもつようになった背後にはどのような価値意識とそれを支える実体的なものが存在するのであろうか。

M. エンデが書いた『モモ』の中で、人間から時間を盗もうとする「灰色の紳士」(der graue Herr) が語る次の言葉は現代のわれわれの暗黙の価値観を正確に言い当てている。「『人生で大事なことはただ一つしかない。』と男は続けました。『それは、何かに成功すること、ひとかどの者になること、つまりたくさんのものを手に入れることだ。他の人より成功し、えらくなり、金持ちになった人間には、その他のもの——友情だの、愛だの、名誉だの、といったものはなにもかも、ひとりでに集まってくるものだ。…』<sup>18)</sup> 相互の比較を通して他の人間に抜きんでること、そしてそのことによって他の人間を支配すること——このことこそわれわれ現代人の目指す究極の目標にほかならず、われわれの価値意識の根底にあるものであり、それが数字をこれほどまでに威力あらしめるものにした当のものであると言ってよいであろう。というのも、比較できるものは目に見えるもの——例えば、貨幣、知識の量、肩書、等——でなければならないがゆえに、それらを直接あるいは間接に表示することができる〈数字〉が強力な道具となるからである。数字によるかかる〈比較〉が可能となるためには、比較するもの同士の間に通じる実体がなければならない。それは人間の〈力〉

であると言ってよいだろう。〈力〉そのものは目にみえないが、それは例えば偏差値、肩書、資本金、成長率、等々といった具体的な形で定在する。それゆえ、〈力〉は数字という比較するための強力な手段がなければ、その威力を十分に発揮することはできない。かくて数字の魔力の根底には〈力〉の問題が伏在している。これについては重大な問題なので後ほど論じることにしてしよう。それにしても数字はそもそもはじめから比較や支配の手段として人間の〈力〉を表示するものであったのだろうか。数字と〈力〉が結びつくようになったのは、どのような世界観や社会的背景を前提しているのだろうか。その経緯を歴史的にたどることによって、われわれは現代社会における数字の役割とその秘密を多少なりとも明らかにして、現代人にとっての数字のあるべき姿を模索するよすがとしたい。

## 2. 歴史的由来

### a) 世界観としての〈数〉の起源——ピュタゴラス

そもそも数字は最初から比較や支配の手段に使われていたのではない。その逆であると言ってよい。数を万物の原理と考えたのはよく知られているようにピュタゴラスである。ピュタゴラスおよびピュタゴラス派の人達にとって、数は人間の魂と宇宙全体の調和そのものを表すものに他ならなかった。アリストテレスはピュタゴラス派の人びとについて次のように述べている。「……彼ら（ピュタゴラスの徒）は、数の構成要素をすべての存在の構成要素であると判断し、天界全体をも音階〔調和〕であり数であると考えた。」<sup>19)</sup> 不死なる魂を死すべき肉体から峻別して魂の輪廻を説くオルフェウス教の信奉者であるピュタゴラスにとって何よりも第一に魂の浄化ということが問題であった。彼は人間の魂を揺さぶる音楽の中に魂を浄化するための秘密があるにちがいないと考えて、人間の魂に調和をもたらす和音の本質を究明した。そして彼は和音が、それを奏でる弦の長さの簡単な整数比で表せることを発見する。かくて彼は数そのものが魂の調和の本質であり、実体であることを見出したのである。<sup>20)</sup> 彼はこうした知見を全

宇宙にまで広げ、宇宙の中に人間の魂の調和の秘密を解く鍵を見出そうとした。このように、彼にとって魂の調和を見出すことと宇宙の調和の探究は切り離せないものであったのである。そして数こそ人間の魂を含む全宇宙組織をつらぬく本質なのである。こうして数は宇宙の調和そのものを表現するもの、と考えられたのである。

ピュタゴラスだけではなく、総じて古代ギリシアの思想家たちは、人間の生き方と世界のあり方とは切り離せないものと考えていた。ソクラテスやプラトンもその例外ではない。プラトンの著作である『パイドン』の中で、当時の自然学が事象が「いかに」起こるかを説明するだけで、それが「なぜ」に起こるかということに答えないのにソクラテスが失望した事情が語られている。<sup>(21)</sup>ソクラテスが失望したのは、譬えて言えば、ある人が急いでいる原因を、その人の目的（意図）から説明せずに、その人の足の骨や筋肉の収縮運動によって説明するようなやり方に対してである。ソクラテスにとって宇宙のすべての事象は「最善のもの」と切り離して考えることができなかった。プラトンやソクラテスが求めた「最善なるもの」とは、究極的には全体の「秩序」や「調和」にかかわるものであるとあってよい。<sup>(22)</sup>したがって彼らにあってはまたピュタゴラスと同じく、宇宙のあり方の探究は、「秩序」や「調和」を求める人間の倫理的なあり方とパラレルに考えられていたと言えるのである。プラトンが「学ぶべき最大のもの」と呼んだ「善のイデア」こそ、世界のあり方と人間の生き方とのこのような調和せる統一の究極的なあり方を示す言葉なのである。

しかしながら、近代の自然科学は、古代の思想家たちとは逆に、世界のあり方と人間の生き方を峻別し、前者から後者を排除する。近代科学はソクラテスとは反対に、与えられた事象を所与のものとして、それをいかに（how）記述するかを問題にするが、与えられた事象がなぜ（why）生ずるか、その根拠を問うことはしない。<sup>(24)</sup>このように近代科学は自然現象から目的を追放して、自然がいかにあるかを細部にわたるまで探究してきたが、こうすることによって、科学はこれまで人間に多大の恩恵を与えてきたこ

とは言うまでもない。しかし他方、近代科学は人間の生きる意味や人間の価値といった数量化できないものを意識的に排除した結果、人間と自然の統一は崩れ、自然は数量化の対象として人間に対立し、かくてそれは人間の支配の対象となってしまう。このような事情をわれわれは近代の科学的世界観の創始者の一人であるデカルトを例にとってもう少し立ち入って説明しよう。

### b) 数量的理性の誕生——デカルト（1596-1650）

デカルトは学問に「有用性」と「確実性」を求めた。『方法序説』の第一部で言われている次の言葉は、学問に対する彼の基本的立場を端的に言い表している。「私は小さい時から文字の学問で生まれ、それによって人生に有用なあらゆるものの、明らかで確実な認識を得ることができると言い聞かされていたので、それを学ぼうというひとかたならぬ意欲をもって<sup>(25)</sup>いた。」デカルトの言う有用性とは、「健康の保持」や「技術の発明<sup>(26)</sup>」といったような人間の生活に直接役立つものから人間の生き方にまでかかわってくるものであるがゆえに、それは広く深い意味をもっているように思われるが、その内容は今は問わないとしても、彼の言うところの有用性は、確実な認識の上に築かれてこそ万人にとって役立つものとなるのである。したがってデカルトのめざしたのは、確実な原理に基づく実際の学問を打ち立てることによって人間を「自然の主人かつ所有者<sup>(27)</sup>」たらしめ、そのことを通じて人間の生活を正しく導くことであった。したがって自然の支配ということがデカルトの大きな関心事であったことは否めない。そのため彼は、物体の総体としての自然を人間の主観から独立した、一定の力学的法則に従う客観的世界とみなし、他方では、物体と厳密に区別された精神（理性）——考える「われ」——の独立性、主体性を確保したのである。こうして人間は知性的主体として、自然を対象化し観察し計量化することによって自然を征服する道を切り開いたのである。周知のようにデカルトは物体を一切の主観的なものから純化することによって、物体の本質規定を「延長」（ひろがり）のうちに見出した。色や香りや形などという

われわれの感覚によって捕らえられる主観的なものは、物体そのものの本質的な性質ではなく、「長さ、幅、深さ」をもつ「延長体」<sup>28)</sup>としての物体こそ、すべての物体を貫く本質規定だというわけである。そしてこの延長体としての純粹で単純な物体を何よりも厳密に規定する学問こそデカルトにとって数学なのである。「こういう次第で、なにゆえに数論と幾何学とが他の学問より遙かに確実であるかは、明白に分かる。すなわちただそれらのみが純粹な単純な対象を取扱い、従って経験によって不確実なされるおそれのあるものを少しも前提せず、理性的に演繹される諸々の帰結のみから成立しているがゆえである。」<sup>29)</sup>

このようにデカルトは物体を延長体とみなすことによって、諸々の質的に異なる存在を同質的で連続的なものとして取り扱い、こうしてあらゆる存在を「計量関係」<sup>30)</sup>に解消する。諸々の存在から一切の「主観的」なものを排除し、量的に表されるかぎりでの存在を「客観的」で「確実な」ものとみなすデカルトの考え方は、言うまでもなく近代の科学的世界観の基本的了解をなすものである。かかる了解に基づいて近代科学が巨大な発展を遂げたがゆえに、デカルトの考え方は現代のわれわれの数字に対する信仰を決定的なものにしたと言えるだろう。数字は一切の主観的なもの、恣意的なものを排した厳密で客観的なものであって、それ自身、物の本質そのものを表現している、という考え方がそれである。次のデカルトの言葉は近代の数量的世界観の誕生を告げるものである。「…人間の努力の大部分はこの比例（事物の関係——引用者）を単純化して行って、求めるものと既知の或るものとの相等性が明らかに見られる点まで進む、というところのみ存するのである。次に注意すべきは、かかる相等の関係に帰せられるものが、ただ、ヨリ大ヨリ小を容れるもの、したがって量という名で理解されるもの、に限るということである。それで、前の規則によって問題の諸項がすべての主観から分離された後は、もはやわれわれはただ量一般を取り扱うのみであることが分かるのである。」<sup>31)</sup>

しかし、ここで注意しなければならないのは、デカルトにとって精神と

物体を厳密に区別すること自体が問題であったのではない、ということである。彼の究極の目的はむしろ、精神と物体を厳格に分離した上で、もう一度両者を合一することであった。それが彼にとって「道徳」の問題であったのである。デカルトは『方法序説』の中で、彼がめざす「確実性」と「有用性」という観点から当時の「数学」と「道徳」について以下のような評価を下している。すなわち、「数学」は「確実性」と「明証性」をその基礎としているにもかかわらず、その用途は機械的技術や築城術といったような狭い範囲に限られていて、その有用性が十分に発揮されていないが、これに反して「道徳」は人間に善く生きる術を教えるがゆえに最も有用な学問であるが、この学問の基礎はこれまできわめてあやふやで脆弱なものであった、というのである。

したがってデカルトにとって問題なのは、「道徳」という人間にとって最も有用な学問を、数学をその典型とするような確実な認識に基づいて打ち立てることである。<sup>32)</sup>あくまで目的は「道徳」であって、あらゆる学問は「道徳」を究極目的としており、そこに到りつくための手段が、彼の言う「方法」なのである。「理性をよく導き、諸々の学問において真理を求めるための方法についての序説」という副題のついた『方法序説』は、科学の方法について述べた書物というよりも、諸々の知識の「最高点」<sup>33)</sup>である道徳に達し得るための道＝方法について論じた著作であると言えることのできるのである。周知のようにデカルトは智恵の体系としての哲学を一本の木になぞらえている。「こうして哲学全体は一本の木のようなものであって、その根は形而上学であり、その幹は自然学、この幹から出ている枝は他のすべての学問であり、これらは三つの主要な学問、すなわち医学と機械学と道徳に帰着する。ここでいう道徳とは、最も高い最も完全な道徳であって、他の諸学の全き知識を前提とし、智恵の最後の段階である。」<sup>34)</sup>

このようにデカルトにとっては「学」と「徳」とは別々のものではなく一体のものであるべきであって、客観的な知識と人間の生き方とは切り離して考えられてはいなかったのである。したがって精神と物体を分けたこ



とは彼にとって、あくまでも一つの抽象＝フィクション<sup>(35)</sup>であって、それは人間の生活を正しく導くための手段でしかなかったのである。しかしデカルト以後、彼の二元論のみが強調され、かかる二元論に基づく「自然の支配」が近代の科学と技術の合言葉となってしまったのである。それと共に自然を「客観的」に表現すべき数も、自然を征服する手段へと変化する。かかる考え方は自然の世界から人間の世界へと侵入し、数字は「自然の支配」への手段から「人間の支配」へのそれへと拡大し、近代人の価値意識をその根底から支えることになる。

近代科学の創始者が築いた力学的世界観の上に立って、近代社会を〈力〉の体系としてとらえ、近代人の本性を冷厳に見つめたのがホッブズである。われわれはホッブズの人間観を考察することによって、近代において数字がこれほどまでに威力をもつようになった社会的背景について次に考えてみよう。

### c) 〈力〉の体系としての近代社会——ホッブズ (1588-1679)

ホッブズはガリレオやデカルトをその創始者とする力学的自然像を近代社会の分析に適用し、物体の運動から説きおこして、人間を「感性を具えた理性的物体」<sup>(36)</sup>とみなし、さらにかかる人間が構成する「人工的人間」<sup>(37)</sup>たる国家を「政治(的物)体」<sup>(38)</sup> (Body Politique) として捉える。物体の運動の世界の実体が力であるように、人間の活動やその所産である国家の実体はホッブズによれば人間が織りなす〈力〉である。ホッブズは力を次のように定義する。「人間の力とは(一般的に考えて)彼が将来明らかに善であると思われるものを獲得するために現在所有している手段である。」<sup>(39)</sup>ここで言われている「善」とは、ホッブズの定義するところによれば、道徳的な善悪に関係はなく、人間の欲求の対象であるところのもの一切を意味しているのであるから、<sup>(40)</sup>〈力〉とは、人間の欲求するものを獲得するための手段、ということになる。「欲求」(および「嫌悪」)は、人間が行動する場合の「内的端緒」<sup>(41)</sup>であるから、すべての人間は嫌悪する対象を避け、欲求する対象を手に入れんとして行動する。したがって、欲求実現のため

の手段である〈力〉が人間の大きな関心事とならざるをえない。〈力〉そのものは目に見えないにしても、それはいろいろな形をとってわれわれの前に現れる。ホップズは〈力〉を、美貌や深慮、雄弁、腕っぶしの強さのような「生まれつきの力」と、財産や名誉や友人のように、さらに多くのものを獲得するための道具となる「手段的な力」とに分けているが、<sup>(42)</sup>〈力〉が両者のうちのどちらに属していようと、それが本来の力たり得るためには社会的な力（ホップズの言葉を使えば「合一された強さ」<sup>(43)</sup>）とならなければならない。「人間の力のうちで最大のものは、できるだけ多くの人びとの力が合成されたものである」<sup>(44)</sup>と彼が言う所以である。

したがって力は他者による評価を不可欠のものとする。他人との比較において自分を優越したものとして示すと同時にそのことを他人から認めてもらいたいという欲求は人間の中に抜きがたく存在する。それゆえに、人間の力の端的な承認に他ならない「名誉」が、人間によってこれほどまで熱心に求められることになるのである。ホップズは言う。「人間は絶えず名誉と威厳を求めて競争するが、これらの動物はそうではない。したがってこの理由により、人間の間には嫉妬や憎悪が生じ、終には戦いが生じる。」<sup>(45)</sup> 名誉欲こそ他の動物にはみられない人間独特の情念であって、この情念のゆえに人間は相互に反目しあうことになるのである。かくて人間は、力の優越を端的に表す名誉を求めて無際限の競争へと駆り立てられる。かかる競争においては、人間の価値評価は力の比較に基づいているがゆえに、力において他を圧倒することによって他人を支配することが人間にとって最大の関心事となる。こうなると、本来人間の欲求を実現するための手段であった力は自己目的と化してしまう。このような必然性は力そのものの本性に由来している。力は比較ということ抜きにしてはあり得ない。なぜなら、力とは他人の力より優っているその超過分を意味するからである。「力は、もし格別すぐれたものであれば善である。もし格別すぐれたものでなければ力は何の役にも立たない。万人に等しい力は無力だからである。」<sup>(46)</sup>

こうして超過分としての力を求めて人びとは競争するのであるが、その場合この超過分は一定のものではあり得ない。というのも、かかる競争の世界においては、自分の力は絶えず他人の力によって脅かされているがゆえに、人間は現在よりもより多くの力を求めるように強いられる。力においては、これでよい、ということはありませんのである。ホッブズは人間が力を無際限に求めざるをえない理由をつぎのように述べている。「その理由は、必ずしも常に、人間がすでに得ている以上につよい喜びを望むということでもなく、また人間が適度の力でもって満足できないというのでもないのであって、むしろ人間は一層多くの力を得なければ、満足して生きていくために現在もっている力と手段とを確かめることができないからである。<sup>(47)</sup> われわれがより多くの力を求めるのは、われわれの本性が貪欲であるからというよりもむしろ、そうしなければ「現在もっている力と手段」を確保し維持することができないからである。こうして人間は今もっている力を保持するため、さらに大なる力を求めて無窮動な力への欲求へと駆り立てられることになる。それゆえホッブズは次のように結論づける。「私は、力につぐ力への不断の不安な欲望——死においてのみ消滅する——を全人類の一般的傾向とみなす。」と。<sup>(48)</sup>

ところで、力が比較の中に存在するとするならば、それは、なんらかの形で目に見えるものでなければならぬ。そうでなければ力は、自分の力を他人の評価によって確かめるというみずからの本性を実現することは不可能であろう。したがって、力は現実には、財産の高、知識の量、名誉の称号、肩書、等々といった具体的な形態で現れる。これら力の種々相の中でホッブズは富（財産）がもっとも根源的な力であると考えているといつてよい。それは彼が人間の価値を価格と等置しているところに端的に表れている。「人間の価値あるいは値打ちは、他のすべてのものと同様、その価格 (price) である。すなわち、人間の力の使用に対して与えられるだけの額であって、それゆえに絶対的なものではなく、他人の必要と判断とに依存している。……他のものと同様、人間の場合にも売り手ではなく、買

い手がその価格を決めるのである。<sup>(49)</sup>」名誉や知識といった人間の主要な欲求の対象も財産と同様にそれ自体に価値があるのではなく、他人の評価(買手がきめる価格)に裏づけられてはじめて価値をもち得るのである。このように名誉や知識も価格の論理に支配されているのである。かかる意味において富(財産)こそ近代社会における最大の〈力〉なのである。ホップズ以後このような認識はA. スミスによって継承された。スミスは「富は力である」というホップズの言葉を引用しながら、富の実体を「購買力」、すなわち「そのときその市場にあるすべての労働、またはすべての労働の生産物に対する一定の支配力」<sup>(50)</sup>の中に見出した。

こうして人間の価値が価格となることによって、人間的なもろものの特性は数量的なものへ還元されてしまう。ここに近代において数字がこれほどまでに威力をもつようになった最深の根拠があるといってもよいであろう。

### 結びにかえて

われわれは現代の数字信仰が近代の科学的世界観や財富の論理に染め上げられた近代人の価値意識の中にその根源をもっていることを見出した。数字は一見すると中立的で人間の価値から自由であるように思われるが、それが近代という歴史社会のコンテクストの中に浸されると自然や人間の支配という直接には目に見えぬ人間の価値意識に浸食される。物体から一切の主観的な要素を抜き去った科学的な世界は、客観的な世界そのもののように見えるが、実はそれは、「速く、便利に、能率よく」という近代の人間に特有の価値意識の上に築かれたものなのである。<sup>(51)</sup>そしてかかる価値観は人間や自然の支配という〈力〉への意志に通底しているのである。ここに現代人の数字信仰の源泉があることは繰り返し確認してきた。われわれは、数字の否定面を強調しすぎたきらいがあるが、もちろん数字を全面的に否定することは思いもよらないことである。近代社会は十二分に数字を駆使することによって、かくも巨大な発展をなしとげた。そのことをわ

れわれは充分認めた上で、というよりもそれを認めるからこそ、数字が人間を超えて一人歩きし、みずからの限界を越えて人間全体を支配してしまう越権に対して注意を怠ってはならないと思うのである。数字は元々、人間と自然との調和を表現すべきものと考えられていたことを思い起こし、近代人特有の「計算的思考」*rechnendes Denken* (ハイデッガー<sup>(52)</sup>)から脱却し、新しい価値意識を創造しなければならない時代を迎えていることだけは確かなようである。

## (注)

- (1) F. Nietzsche. *Also sprach Zarathustra*. Kröners Taschenausgabe Bd. 75, Stuttgart, 1969, S. 207. 手塚富雄訳『ツァラトウストラ』(中央公論社、『世界の名著』46、『ニーチェ』1966年, 所収) 280頁。ただし、必ずしも邦訳に従っていない。以下の引用文についても同様である。
- (2) もっぱら数量的に大きいもののみ関心を向ける生活態度を、ヴェーバーは「数字のロマン主義」(*Zahlenromantik*)と呼んでいる。Vgl., M. Weber, *Die Protestantische Ethik und der »Geist« des Kapitalismus*. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. 1, Tübingen. 1920. S. 54. 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波書店, 1988年) 57頁。
- (3) 1992年2月3日付け朝日新聞の「天声人語」から引用。
- (4) 例えば、ヘーゲルは数の抽象的な性格を次のように語っている。「数とはまさに、全く静止した、死せる、他のものと無関係な規定性であり、この規定性においては、あらゆる運動と関係は消え去っており、またこの規定性は、諸々の衝動や生命のあり方という生動的なものへ、さらにその他の感覚的な存在へかけられた橋を断ち切ってしまうのである。」(Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. hrg. von J. Hoffmeister, Hamburg, 1952, S. 212.)。だからヘーゲルは、数をそのエレメントとする数学について端的に次のような評価を下している。「数学がもっぱら考察するものは、量 (*die Größe*) という非本質的な差異である。」(*Ibid.*, S. 38. Vgl. S. 40. S. 215, usw.)
- (5) (注)の(4)で紹介したように、ヘーゲルは、数という規定性は生命あるものや感覚的存在への通路を断ち切ると言っているが、実際、点数や偏差値に基づく競争体制の下では、共感や思いやり、優しさといった人間的な感情は断ち切られてしまう。
- 教育学者の堀尾輝久氏は次のように述べている。「『できる子』の能力の内容を

みれば、それが創造的思考や批判的精神とは無縁の雑多な知識の記憶量や短絡的な反射的思考の早さでしかないことが多いのです。さらにまた、友人を蹴落としてすすむ競争体制のなかで、他人の喜びや悩みに共感する能力、あるいはやさしさや思いやりに欠けた人格になっている場合も多いのです。」(堀尾輝久著『教育入門』, 岩波新書, 88頁)。

- (6) K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*, Marx Engels Werke. Dietz Verlag. Ergänzungsband. S. 544. 城塚, 田中訳『経済学・哲学草稿』(岩波文庫, 1971年) 144頁。
- (7) 奥村 宏『法人資本主義』(〔改訂版〕, 朝日文庫, 1991年) 41頁。
- (8) 奥村 宏, 前掲書, 32頁参照。
- (9) 奥村 宏『新しい企業像のために』(雑誌『世界』〔岩波書店〕1992年2月号) 27～28頁参照。
- (10) Antoine de Saint-Exupery, *Le Petit Prince*, Gallimard, Paris (Copyrighted in Japan by Daigakushorin, Tokyo), p. 10. 内藤 濯訳『星の王子さま』(岩波少年文庫, 1978年) 23-24頁。
- (11) M. エンデ, E. エプラー, H. テヒル, 『オリーブの森で語りあう』(丘沢静也訳, 『同時代ライヴラリ』66, 岩波書店, 1991年) 132頁。  
もちろん、このような考え方を表明したのはエンデが初めてというわけではない。近代市民社会の黎明期にルソーやスミスがすでに指摘しているところである。ルソー『エミール』(今野一雄訳, 岩波文庫, 上巻) 347頁以下。アダム・スミス『国富論』(大河内一男監訳, 中央公論社, 1988年) 518頁以下参照。
- (12) Cf. A. Leijonhufvud, *Life among the Econ*, Western Economic Journal, Sept. 1973. 武藤博道訳『エコノ族の生態』(『展望』〔筑摩書房, 1974年3月号〕所収)
- (13) 宇沢弘文『『豊かな社会』の貧しさ』(岩波書店, 1989年) 175頁以下参照。
- (14) 宇沢弘文, 前掲書, 178頁参照。
- (15) 宇沢弘文, 前掲書, 178-179頁参照。
- (16) キルケゴール『現代の批判』(柘田啓三郎訳, 中央公論社, 『世界の名著』40所収) 397頁。
- (17) キルケゴール『死に至る病』(齊藤信治訳, 岩波文庫, 1972年) 52頁。
- (18) ミヒャエル・エンデ『モモ』(大島かおり訳, 岩波書店, 1986年) 126頁。
- (19) アリストテレス『形而上学』第1巻5章。
- (20) 藤沢令夫『哲学の形成と確立——タレスからアリストテレスまで——』(服部・藤沢編, 岩波講座『哲学』XVI, 「哲学の歴史I」所収, 岩波書店, 1968年) 84頁以下参照。
- (21) プラトン『パイドン』98A以下参照。
- (22) プラトン, 前掲書, 97D, 98B.

- (23) この点に関しては次の著書を参照。ガスリー『ギリシアの哲学者たち』（式部、澄田訳、理想社、1977年）141頁以下。斉藤忍随『プラトン』（岩波新書、1984年）153頁以下。
- (24) この点に関する近代科学の問題性を広い視野から論究しておられる藤沢令夫氏の一連の研究は注目に値する。藤沢令夫『自然・文明・学問』（紀伊国屋書店、1983年）、『哲学の課題』（岩波書店、1989年）、『世界観と哲学の基本問題』（岩波書店、1993年）を参照。
- (25) Descartes, *Discours de la méthode*, Oeuvres et lettres, Gallimard, 1953. p. 127-128. 野田又夫訳『方法序説』（中央公論社、『世界の名著』22「デカルト」、昭和48年）165-166頁。
- (26) Cf., Descartes, *Les principes de la philosophie*, Oeuvres et lettres, Gallimard, 1953, p. 557. *Discours de la méthode*, p. 168. 井上、水野訳『哲学の原理』（中央公論社、『世界の名著』22）315頁。野田又夫訳『方法序説』210頁。
- (27) Descartes, *op. cit.*, p. 168. 野田訳『方法序説』210頁。
- (28) Descartes, *Règles pour la direction de l'esprit*, Règle XIV. p. 98 suiv. 野田又夫訳『精神指導の規則』（岩波文庫、1990年）109頁以下。
- (29) 野田訳『精神指導の規則』15頁。
- (30) 同、30頁、118頁。
- (31) 同、105頁。
- (32) デカルトの「道徳」論については、「有用性」と「確実性」をいかに統一するかというデカルトの思想の根幹に係わるので、他日改めて論じたいと思う。デカルトというと物体（身体）と精神（心）との二元論のみが取り上げられるが、彼の究極の意図はそこにはなかったことを現代のわれわれは特に注意すべきであろう。
- (33) 野田訳『方法序説』、164頁。
- (34) 井上、水野訳『哲学の原理』325頁。
- (35) ミヒャエル・エンデは近代の科学的な世界観の抽象的な性格を文学者らしい鋭い直観でもって、次のように指摘している。「十六世紀はじめには、世界を客観と主観に二分するのは、なにか特定の研究をすすめるためのまったくのフィクションだということが、まだみんなの意識にのこっていた。ところが時代がすすむにつれて、この二元論はフィクションにもとづいているという点がすっかり忘れられてしまったようだ。今日ではほとんどの人が客観的な世界と主観的な世界があるということを知りて疑わない。……というわけでぼくたちの思考は袋小路にはいりこんでいて、認識の発達などいっさい望めない状態だ。……このあやまった概念を克服する方法は、ぼくの考えでは、ひとつしかない。つまり、二元論を棄ててフィクションをフィクションとして再確認する。それから人間の意識と世

界とがわかちがたくひとつに結びついており、両者が一枚のコインの裏表でしかない、ということを理解する。それしか方法はない。」(M. エンデ, 他『オリーブの森で語りあう』〔丘沢静也訳〕前掲書, 36頁以下。)

『モモ』の中で「ほんとうの時間というものは、時計やカレンダーでははかられるものではないのです。」(『モモ』前掲書, 285頁)といわれているのは、エンデの上記のような考え方に関連していると言ってよいだろう。

- (36) Hobbes, *De Corpore* (Opera philosphica, ed. by G. Molesworth, 1839, vol. I) p. 73.
- (37) Hobbes, *Leviathan*, (Oxford, 1909), Introduction. 水田 洋訳『リヴァイアサン (一)』(岩波文庫, 1975年) 37頁。
- (38) Hobbes, *op. cit.*, p. 8. 邦訳, 38頁。
- (39) Hobbes, *op. cit.*, p. 66. 同, 145頁。
- (40) Hobbes, *op. cit.*, p. 41. 同, 98頁。
- (41) Hobbes, *op. cit.*, p. 39. 同, 95頁。
- (42) Hobbes, *op. cit.*, p. 66. 同, 145頁。
- (43) Hobbes, *op. cit.*, p. 66. 同, 146頁。
- (44) Hobbes, *op. cit.*, p. 66. 同, 145頁。
- (45) Hobbes, *op. cit.*, p. 130. 邦訳『リヴァイアサン (二)』31頁。
- (46) Hobbes, *De Homine* (opera philos. vol. II) p. 98.
- (47) Hobbes, *Leviathan*, p. 75. 同, 164頁。
- (48) Hobbes, *op. cit.*, p. 75. 同, 164頁。
- (49) Hobbes, *op. cit.*, p. 67. 同, 147-148頁。
- (50) アダム・スミス『国富論』前掲書, 54頁。
- (51) この点については、藤沢令夫氏の前掲書参照。
- (52) Vgl., M. Heidegger, *Gelassenheit*, (Verlag Günther Neske, Pfullingen, 1959.)  
(本研究は平成3年度広島経済大学特定個人研究費の援助を受けたものです。記して感謝申し上げます。)